

水 稲

1. 作付の概況

九州における平成18年度の水稲作付面積（青刈り面積除く）は、20万200haで、前年に比べて2,000ha（1%）減少した。これは、作付しない水田の増加や稲発酵粗飼料（ホールクロップサイレージ）用稲の作付が増加したためである。品種毎の作付状況を見ると、ヒノヒカリの割合が最も多く全作付品種の56%（前年と同じ）であり、次いでコシヒカリ14%（前年と同じ）で、両品種で70%の作付面積をしめている。

2. 作柄の概況

九州における平成18年産水稲の収穫量は、78万400tで、前年に比べて17万9,100t減少した。これは、作付面積が減少したことに加えて、10a当たり収量が大きく減少（-84kg）したためである。

九州平均の作柄は、作況指数78の「不良」で、10a当たり収量は390kgであった。九州沖縄の県別の作況指数は、佐賀県が49と最も低く、長崎県が68、福岡県が76、大分県が79、熊本県が85、鹿児島県が91、沖縄県が94、宮崎県が95と、全ての県で「不良」から「やや不良」となった。

3. 生育の概況

1) 普通期水稲

分けつ期にあたる7月の降水量が多く、日照時間も少なく梅雨明けも遅かったため、穂数は「少なく」、 m^2 当たり籾数についても、各県とも「少ない」ないし「やや少なく」なった。田植期を遅らせたことと、6月下旬からの曇雨天による日照不足の影響で、出穂期は、概ね「1日から3日程度遅く」なった。本年は、ヒノヒカリの幼穂形成期に当たる8月17日に宮崎に上陸した台風10号と、登熟最盛期に当たる9月17日に長崎に上陸した台風13号による潮風害やもみずれ、葉先の裂傷及び倒伏等の被害があった。それに加えて、登熟前半の日照不足および台風通過後の少雨の影響により、登熟は著しく阻害され、「不良」となった。

玄米品質についても、1等米比率が九州全体で28%と、全国平均の78%を大きく下回った。これは、台風13号の潮風害や台風通過前後の悪天候により、充実不足や白未熟粒の発生が多く、2等以下に格付けされたためである。特に、北部九州の熟期の遅い中晩生品種では規格外となったものも多かった。

2) 早期水稲

主産県の作柄は、宮崎県が10a当たり収量472kgで作況指数100、鹿児島県が同435kgで作況指数99の「平年並み」であった。

5月の日照時間が平年に比べて少なく、初期の茎数は平年に比べて少なくなったが、その後は天候が回復して、 m^2 当たり籾数は「平年並み」となった。出穂期にあたる6月下旬から7月上旬にかけて寡照であったものの、その後はおおむね天候に恵まれたことから、宮崎県、鹿児島県ともに、登熟は「平年並み」となった。

登熟期には、カメムシの発生予察注意報が発令されるなど斑点米の発生が平年より多く、また、充実不足や白未熟粒も発生し、玄米品質は前年よりやや低下した。

4. 被害の概況

水稲の被害面積は73万9,000haあり、被害総量は33万6700tで被害率は33.5%と、平年を22.0ポイントも上回った。種類別に見ると、台風13号などの風水害が16.8%と最も大きく、次いで日照不足の10.3%、紋枯病1.7%、いもち病1.4%となった。

2006年産水稻の収穫量

区分	作付 面積	10 a 当たり 収量	収穫量 (t)	作況 指数	前年との比較					
					作付面積		10a当たり収量		収穫量	
					対差 (ha)	対比 (%)	対差 (kg)	対比 (%)	対差 (t)	対比 (%)
九州計	200,200	390	780,400	78 △	2,000	99 △	84	82 △	179,100	81
福岡	41,200	382	157,400	76 △	400	99 △	100	79 △	43,100	79
佐賀	29,000	262	76,000	49 △	500	98 △	229	53 △	68,800	52
長崎	14,700	322	47,300	68	0	100 △	128	72 △	18,900	71
熊本	42,000	440	184,800	85 △	600	99 △	39	92 △	19,300	91
大分	26,200	395	103,500	79	0	100 △	64	86 △	16,800	86
宮崎	21,500	465	100,000	95 △	300	99 △	8	98 △	3,100	97
鹿児島	25,600	435	111,400	91 △	200	99 △	32	93 △	9,100	92
沖縄	1,040	291	3,030	94 △	20	98	8	103	30	101

注) 資料：平成18年産水陸稲の収穫量（2006.12.05，農林水産省大臣官房統計部）
△は減少を示す。